

古代ペルシア語 *mana krtam* とその展開

野 田 恵 剛

古代ペルシア語 (OP) で刻まれたダーラヤワウ (ダリウス) 大王のバガスターナ碑文第一欄 27行以下 (DB 27f.) には次のような文がみられる。ima taya mana krtam pasāva yaθā xšāyaθya abavam.⁽¹⁾ 「これが、私が王となって後、私がなしたことである」。同碑文は主にダーラヤワウ大王の諸邦征服過程をのべたものであるが、この文の前半の *ima taya mana krtam* 「これが私のなしたことである」という表現は、各地方での反乱軍の鎮圧の模様を伝えた後に随時とえられている。たとえば第3欄ではパールサ地方でのワフヤズダーダの反乱とアルタワルディヤに率いられたダーラヤワウ軍によるワフヤズダーダ討伐のようすをのべたあとでこうしてされている。ima taya mana krtam Pārsai. 「これが、私がパールサでなしたことである」 (DB III153) 今上にあらわれた *ima taya mana krtam* という構文は長い間「受動文」であるとみなされてきたが、1952年 E. Benveniste は慧眼よくこの構文が「所有構文」であり、「能格 (ergative) 構文」であることを看破してイラン語の動詞研究に新たな光をなげかけた。彼の説は W. B. Henning 等のうけいれるところとなったが、いまなお十分にイラン語研究者にうけいれられているとは言いがたい。⁽²⁾ 本稿では今一度 OP 資料にもとづいてこの構文を検討し、さらに中世ペルシア語 (MP) への発展について考察してみることにする。⁽³⁾

mana krtam の従来の解釈には、本質的には同じであるがそのあらわれ方の異なる二つの説があると思われる。その一つは *mana krtam* を名詞表現であるとみるものであり、もう一つは定動詞表現とみるものであるが、いずれも *mana krtam* を「受動」表現とみる点では一致している。

krtam は語根 *kr-* 「なす、作る」から派生された過去受動分詞で「なされた」を意味するが、第一の解釈によるとこれをさらに名詞的に「なされたこと」と解釈し、*mana* (人称代名詞 1 人称単数、属格・与格) をそれにかかる属格と解釈する。つまり *mana krtam* は「私のなしたこと」である。これによれば DB I 27 *ima taya mana krtam* は次のような訳になる。

‘dies ist das von mir Gethane’= ‘was ich that’ (Horn)⁽⁵⁾

日本においてこの説を代表するのは伊藤義教教授である。そこで同教授の『古代ペルシア』⁽⁶⁾ によってこの説を検討してみよう。同教授によると *ima taya mana krtam* を含む文の訳は次のようである。

DB I 27f. *ima taya mana krtam pasāva yaθā xšāyaθya abavam* 「これが、余が王とな

ってのちの、余の所成（である⁽⁷⁾）」

DB II 91f. ima taya mana krtam Mā dai. 「これが、マーダ（メディア）における余の所成（であった）⁽⁸⁾」

伊藤教授が krtam を「所成」と訳すことによって krtam の元来の意味をも日本語で表わそうと苦心しておられることは明瞭であるが、上の訳文から判断する限り、「所成」とは要するに「なしたこと、業績」であり、krtam を名詞（化した分詞）と解していることも明らかであろう。そうすると ima taya mana krtam は名詞文で、簡単にいえば「これが私の業績である」を意味することになる。するとここでは関係代名詞 taya はいかなる機能を果しているのでしょうか。ima taya mana krtam が単純に「これが私の業績である」を意図するものであれば taya を省いて *ima mana krtam (asti) で十分なのではないだろうか。DB よりも後代のものであるがフシャールシャン（クセルクセス）一世のペルセポリス碑文 a 18行以下には次のような文がある。

mām Ahuramazdāh pātu uta-mai xšačam uta taya mana krtam uta taya-mai piça krtam avašči Ahuramazdāh pātu 「余をアウラマズダーは守り給え、そして余の王国をも。また余の所造と余の父の所造——それを、アウラマズダーは守り給え」(伊藤教授⁽⁹⁾)

ここでは krtam は「所造」と訳しかえられているが、ここには mana krtam と並んで -mai piça krtam という表現がみえる。-mai piça「私の父」の格形は mana のと一致しているので同教授によれば「余の父の所造」となる。しかしここにはその上 -mai xšačam「私の王国」という明らかに名詞をもつ例がある。上で krtam を名詞とみなせば taya が不要ではないかと述べたが、-mai xšačam には taya はつけられていない。従って taya mana krtam や taya-mai piça krtam を「余の所造」、「余の父の所造」と解すると taya が余分なことは明らかである。さらに次の例をみてみよう。

DB IV 46f. vašnā Ahuramazdāha uta-mai anyašči vasai asti krtam 「アウラマズダーの御意によって、またほかにも、余によって数多くなされており」(伊藤教授⁽¹⁰⁾)

DB IV 52 yaθā mana vašnā Ahuramazdāha hamahyāyā θarda krtam 「アウラマズダーの御意により同一年に余によってなされたごとく」(伊藤教授⁽¹⁰⁾)

ここでは mana(=-mai)と krtam は他の語句の介在によって隔てられており、伊藤教授も「余によって……なされた」のように前のとは別の訳語を使っておられる。しかし mana krtam と mana...krtam はこれほど訳をかえる必要があるほど全く異なる表現であろうか。

碑文をさらに細かく観察すると mana krtam と類似の表現があることに気づく。次にあげる例がそれである。

DB II 27 avaθa-šām hamaranam krtam 「これが、かれらの交えた合戦（であった）」(伊藤教授⁽¹¹⁾)

この表現もまた *ima taya mana krtam* と同様に、ダーラヤワウ軍と反乱軍との戦いの日時を表わす語句の後で頻りに用いられるが、ここでは問題はさらに複雑である。というのは *krtam* を名詞ととり、*-šām* (人称代名詞三人称複数、属格-与格、前接形) を「彼らの」とみなすと、これが *hamaranam* 「戦い」にかかるのか *krtam* にかかるのかあいまいになるのである。そこで伊藤教授は今度は *krtam* をあたかも形容詞のようにみなし、しかも *ima taya mana krtam* にならって原文にはみあたらない「これが」を補って上のような訳を示された。あたかも DB II 27が独立した文ではないかのごとく。このように余計な訳語を補うぐらいならばむしろ *-šām* と *krtam* がはなれている点に注目して DBIV 52と同じく「その時彼らによって合戦がなされた」とでも訳すべきではなかったのではないだろうか。⁽¹²⁾

以上のようにみてくると *krtam* を名詞ととると様々な統語論上の問題にぶつかり、しかも単純すぎるほど単純な疑問を多くかかえもって、とうてい精査にはたええないものであることが判明しよう。*ima taya mana krtam* を中心として展開したこのいわゆる *mana krtam* 構文の第一の解釈の欠陥は何よりもまず *mana krtam* を *ima taya mana krtam* という文全体の中で構造的にとえる視点に欠け、従ってこれが「定動詞」構文であることを見ぬけなかった点にある。それは必然的に *taya* が関係代名詞であることをみのがすことになった。上にみたように DB IV 46f.のごとく *asti 'is'* のある場合には、伊藤教授もここに定動詞表現をみとめておられるが、DB IV 52では *asti* が欠如しているにもかかわらず DB IV 46f. と同じように訳しておられる。ところが DB I 27では *mana krtam* は「余の所成」となっているのである。この訳しわけの理由は簡単である。DB I 27では *mana* と *krtam* が連続してあらわれるのに対し、DB IV 46f. その他では両者の間に他の語句が介在するからにはかならない。しかしながら *mana krtam* と *mana...krtam* を区別すべき理由はみあたらないように思われる。

第二の解釈は *mana krtam* を定動詞構文とみるけれども、これを「受動文」とみなすのである。実際第一の解釈は第二の解釈からいわば派生的にでてきたものであって *mana krtam* 構文の解釈の本質をなすものではなく、むしろ重要なのは第二の解釈である。これによると *ima taya mana krtam* の訳は次のようになる。

This is what was done by me. (Kent)⁽¹³⁾

dies ist, was von mir getan worden ist. (R. Schmitt)⁽¹⁴⁾

mana krtam を「私によって (...が) なされた」と解そうとする場合に問題となるのは *mana* の格である。上の訳例においては *mana* は 'by me' ないし 'von mir' で訳されているが、OP には動詞の形態によって保証された受動文があり、その場合行為者は *hača*+尊格であらわされるのが普通である。たとえば、

DB I 19f. *taya-šām hačāma a0ahya* 「私によって彼らに命じられたこと」

ここでは *a0ahya* が受動形であることは疑いえず、先の *mana* と *hačāma* との格の不一致は

おおうべくもない。とすればなぜ *mana krtam* が受動文であると判断されるのであろうか。サンスクリットには一見 *mana krtam* に似た構文があるがそこでも行為者は具格であらわされている。たとえば *mayā snānam kṛtam* 「私によって水浴がなされた」、*Rāmeṇa jitam* 「ラーマ王によって征服された」

さらに DB の碑文をみると冒頭にかかげた DB I 27f. と極めて類似した表現が同じ DB I の72行にみられるので両者を並べてあげる。

DB I 27f. *ima taya mana krtam pasāva yaθā xšāyaθya abavam*

DB I 72 *ima taya adam akunavam pasāva yaθā xšāyaθya abavam*

ここでは両者のちがいは *mana krtam* と *adam akunavam* だけであり、両者がほぼ同じ意味であることはまちがいない。*adam akunavam* は明らかに能動形で「私はなした」を意味するが、第二の解釈によれば DB I 27f. は DB I 72に対する受動文ということになる。このような能動文と受動文の対立の例はまだ他にもある。たとえば、

DB III 53 *ima taya mana krtam Pārsai* 「これが、パールサにおいて私によってなされたことである」

DB IV 40 *ima taya adam akunavam...* 「余がなしたこのことは」(伊藤教授)⁽¹⁶⁾

DB III 53 と DB IV 40 は厳密には上のように比較するべきではないがさしあたっては *taya mana krtam* と *taya adam akunavam* の所に注目すればそれでよく、ここでも *mana krtam* と *adam akunavam* の対立がみられる。この種の対立は *ima taya mana krtam* だけにとどまらずすでにみた DB II 27についてもみられる。類似の箇所が多いので例として DB II 33以下を下にあげてみよう。

Zūzahya nāma āvahanam Arminyai, avada hamaranam akunavan. Ahuramazdā-mai upastām abara. vašnā Ahuramazdāha kāra haya mana avam kāram tayam ham-miçyam ašan vasai. Ōuravāharahya māhyāh VIII raučabiš θakatā āha. avaθa-šām hamaranam krtam. 「ズーザフヤというアルミニヤ(アルメニア)の集落——そこに合戦を交えた。アウラマズダーは余に佑助を賜わった。アウラマズダーの御意により、余の軍は離反せるかの軍を大いに討った。スーラワーハラの月の、日数にして八日が経過中であつた。これが、かれらの交えた合戦(であつた)。(伊藤教授)⁽¹⁷⁾

上例の最後の *avaθa-šām hamaranam krtam* を上で試みたように「その時彼らによって戦いがなされた」と訳してみると、これは *avada hamaranam akunavan* 「そこで彼らは戦いをなした」に対応する受動文になる。こうしてみると DB の中ではあたかも能動文と受動文が自由自在に交替するような印象をうける。特に DB I 27f. と同72は *mana krtam* と *adam akunavam* を除けば他は全く同一で、しかも両者は同じ第一欄にあらわれる。OP は態に関してはこんなにも寛容だったのであろうか。

ペルシア語の歴史をたどってみると今あげた二つの対立する文には年代的な差があることがわかる。MP では *adam akunavam* 型の過去形は失なわれ、*mana* (又は *-mai*) *krtam* 型の表現が他動詞の過去形として一般化する。そこで今度は MP の事例について考察してみることにする。

MP の他動詞の過去は「受動」的に構成され、動詞の真の目的語は形式的主語にかえられ、その真の主語は行為者としてあらわれ、これは可能ならば斜格であらわされるといわれている。⁽¹⁸⁾ その例を Nyberg の *A Manual of Pahlavi II* の文法編から引用してみよう。

(1) *api-š man bē ō zrāh kašit ham.*⁽¹⁸⁾

(2) *tō amāh-ic dāt hēm.*⁽¹⁸⁾

(1)は受動文としては「彼によって私は海へつれてゆかれた」、(2)は「汝によって我らは創られた」とでも訳することができる。ここではいわゆる主語に助動詞が一致していて (*man...ham*, *amāh...hēm*)、一見「受動文」のようにみうけられ、事実そのように解釈する方が印欧語の型にうまくあてはまるように思われる。さらに例をあげると、

(3) *gazān ašān pus jūt.* “by the snakes their young was eaten”⁽¹⁸⁾

(4) *dēvān vāt frēft.* “the Wind was cheated by the devs”⁽¹⁸⁾

(1)や(2)のように形式的主語に助動詞 (*h-*) が一致している場合にはこれらの構文を受動文とみることは可能であろう。また(3)、(4)のように助動詞が欠如する場合(形式的主語が3人称単数)でも、行為者が複数斜格をとっている限りそうみることはできる。ところがこの複数斜格の語尾 *-ān* は時代を下るにつれて格を弁別する機能を失ない、単に複数の指標辞となってゆく。MP では定動詞は通常文末に位置するのでそうした場合もはや(3)、(4)においていずれが行為者かを断ずることはできなくなっている。もっと事態が深刻なのは行為者も形式的主語も単数名詞の場合である。ここでは主格と斜格の対立はやくから失なわれ、両者を形態的に区別することは複数の時よりもずっとはやくからできなくなっている。MP の後期のテキストには *Ardavān kanīcak xʷāst* のような文がみられるが、この文が受動文「アルダワーンによって腰元は呼ばれた」なのか、能動文「アルダワーンは腰元を呼んだ」⁽¹⁹⁾ なのかを判断する決め手は全くないのである。Nyberg によれば「受動的に構成された過去をもつ言語はすべて必然的に同じ運命をたどる。すなわち形式的主語はたえず行為の真の目的語と感じられるので、それに従い受動的な過去は多かれ少なかれ能動形と感じられる」⁽¹⁸⁾。そして上の文の「正しい文法的分析は、最初の語を行為者と、第二を主語ととるべきであるが、心理的には *kanīcak* が直接目的語、*Ardavān* が主語である。」⁽¹⁸⁾ しかし上のべたように、特に単数では、行為者と形式的主語を形態的に区別する手段はMPの相当早い時期から失なわれていたのであるから、「正しい分析」も「心理的」分析もないわけである。⁽²⁰⁾ それにしても受動文が能動文と感じられるという上の発言には一体いかなる言語事実の裏づけがあるのだろうか。筆者は不幸にしてこのような例を知らない。Nyberg が MP の他動詞の

過去を受動形と解した理由は(1), (2)に示した形式的主語と助動詞の一致のゆえであろうし, Ardavān kanīcak xwāst を形式的には受動形だと解そうとするのはそれらからの類推によるものであろう。またこれが能動形とも解しようとするのは, MP には行為者が代名詞の場合, それはできるだけ文頭近くにおかれるという規則, 並びに行為者と目的語 (=形式的主語) が両方共名詞の時には, 行為者が目的語に先行するという規則があるからには⁽²¹⁾ほかならない。この規則のためには実際は上にのべたような生ずべき混乱は起こらなかったのである。

さらに MP の他動詞の過去には注目すべき特徴がある。すなわちこの型の過去は他動詞に限られ, その上他動詞も現在時では能動形をとる。従ってこの「受動」形は MP の動詞体系の中では孤立した形であるということが出来る。

以上によって OP mana krtam 及びその発展継承形たる MP の他動詞の過去に関する事実関係ならびにこれらを「受動」と解した時に生じる様々の矛盾の提示を終えることにする。これらの矛盾を解決したのは E. Benveniste である。

Benveniste は OP の所有構文が〈与格 + 'be'〉型である点に注目して, これと mana krtam との間にみられる平行性を指摘した。すなわち OP では「私に息子がある」は *mana puça asti となるが, mana krtam (asti) はこれと全く平行的で次のような等式が成立する。⁽²²⁾

*mana puça asti 《mihi filius est》=《habeo filium》

mana krtam asti 《mihi factum est》=《habeo factum》

従って mana krtam は「受動」構文ではなく所有構文, つまり「能格」(ergative) 構文である。

この Benveniste の着眼は非常にすばらしく, これを疑うことはできないと思われるが, 等式自体は大きな問題を⁽²³⁾はらんでいる。というのは彼は ima taya mana krtam は正確に 'voilà ce que j'ai fait' と訳しているけれども, mana の前にある taya が先行詞をふくむ関係代名詞であるということのみがして, mana krtam を ima taya mana krtam という文全体との関係でとらえることができなかつた。ima taya mana krtam を英訳と対比して示せば

ima taya mana krtam (asti)

this (is) that which I done have

となって mana krtam だけでは完全な文をなさないことに気づく。関係文から mana krtam をとりだして独立した文を作れば, たとえば *mana ima krtam のごときものがそれである。従って上の所有構文とこれを比較すれば次のような等式となるべきである。

*mana puça asti
私に 息子が ある

*mana ima krtam (asti)
私に これが なされて ある

これは他の印欧語にみられるのとは表面的にはちがっているけれども, 'habeo factum' の訳

からわかるように、形をかえた「完了形」にすぎない。

上で OP *adam akunavam* と *mana krtam* には年代的な差があることをのべたが、(Meillet-) Benveniste は *adam akunavam* は 'acte' を、*mana krtam* は 'réalisation achevée' を表わすとして共時的にも両者の間に差をみとめようとしている。⁽²⁴⁾しかし DB I 27f. と DB I 72 を比較した時そのような差異は認めえないと思われる。むしろ *mana krtam* が形成された当初にはそのような差があったとすることはできるとしても、MP では *adam akunavam* は全く使用されなくなったという事実にかんがみればそのような差は次第に感取されなくなり現存する OP 碑文の中ではほとんど失なわれていると言ってよい。OP の過去を表わす形式である未完了過去⁽²⁵⁾にとってかわったのが *mana krtam* 型の完了形なのである。このように (*adam*) *akunavam* タイプの過去形が *mana krtam* タイプの完了形にとって代わられる過程は、丁度フランス語で単純過去 (*passé simple*) が複合過去 (*passé composé*) にとって代わられる過程に酷似している。

さて MP の他動詞の過去は OP の所有構文から容易に導き出すことができる。たとえば「彼には私がいる」は OP では **-šai adam ahmi* となるはずであるが、これによって「彼は私をしばった」は、

**-šai adam bastam ahmi*

となり、これを MP 形になおすと

-š man bast ham

となって極めて MP 的な文ができあがり、形式上の主語 (*man*) と助動詞 (*ham*) の一致はうまく説明される。つまりこの一致は決して「受動文」であることによるのではなく「所有構文」であることに起源するものである。

MP の他動詞の過去が「受動」ではないという主張は MP 内部の側からも支持をうける。一つには、このいわゆる「受動」的な過去はこの時制だけに限られ、しかもそれにとりうるのは他動詞だけであるという特異な事実である。もし過去が受動形であるとするならば、MP の他動詞は現在で能動形、過去で受動形を用いるという奇妙な現象が存在することになり、これは類型論的にうけいれがたい。⁽²⁶⁾さらに MP の自動詞文の過去と他動詞文の過去を比較すると次のようになる。

(自) *man āmad ham* 「私は来た」

(他) *-š man bast ham* 「彼は私をしばった」

これを見ると自動詞文の主語が他動詞文の目的語になっていることがわかる。このような自動詞文の主語と他動詞文の目的語との平行性は「能格性」(ergativity) ⁽²⁷⁾といわれ、能格構造 (ergative construction) をもつ言語に特徴的なものなのである。

近年の、特にソビエトの学者を中心とした研究によってこのような能格構文が現代イラン語の諸方言にも残存していることが知られるようになった。従って MP における能格構文の存在は生

きた言語の側からも支持をうけるわけである。たとえばプシュトゥー語においては、能動現在形 *zə day tarəm* 「私は彼をしぼる」、受動過去形 *day zmā lə xvā tarəl(ay) kedə* 「彼は私によってしぼられた」⁽²⁸⁾ に対して、能格構文 *mā day tarə* 「私は彼をしぼった」がみられる。

ところで近世ペルシア語(NP)では過去形は自動詞、他動詞共能動形をとる。たとえば、*man āmadam* 「私は来た」、*išān man(rā) bastand* 「彼らは私をしぼった」。それゆえMPの他動詞の過去が受動であるとする歴史的にみても奇妙なことになる。MPの他動詞の過去形がNPにいたる過程で能動形にかわったのは決して Nyberg が主張するように受動文が能動文と感ぜられるようになったなどというものではない。主な理由として考えられるのは、能格構造の使用者の言語意識においてはこの構造は決して受動とは感ぜられないという事実⁽²⁹⁾、さらに他動詞の過去の構成法が動詞組織の中で孤立しており、体系の圧迫をうけた、等である。

最後に NP の複数語尾 *-ān* について考えてみよう。現代ペルシア語では *-ān* は普通 *-hā* によって代わられているが、古典ペルシア語では通常 *-hā* は無生物 (inanimate) 名詞に、*-ān* は生物 (animate) 名詞に用いるという使いわけがある⁽³⁰⁾。この *-ān* が OP の複数属格の語尾 *-ānām* (e. g. *martiyānām* 「人々の」) に由来することは前世紀に Darmesteter が指摘しているが、彼はその理由をみつけることはできなかつた⁽³¹⁾。NP の *man* 「私」が OP *mana* に起源するであろうことは形態上容易に理解しえたから、それと類推的に複数属格語尾 *-ānām* から *-ān* を導きだすことはさほど困難ではないようで Darmesteter の説はその後一般に承認された。ただなぜ属格の語尾を選択したかは今まで不明であった。上の議論はその選択の理由を解明した。すなわち OP の属格 (与格) は能格の機能をも帯びるにいたったが、MP 以来この能格として用いられた属格 (与格) 形が代名詞形、複数語尾として次第に一般化していったのである。従って古典ペルシア語において *-ān* と *-hā* に使いわけがあり、*-ān* が生物名詞に対して用いられたのは故のないうことではない。なぜなら能格になりうるのはふつう生物名詞だからである。

注

- (1) OP の転写は W. Hinz, *Neue Wege im Altpersischen*, Wiesbaden, 1973, IV章に従った。ただし音素 /d/ は問題があると思われるので従来のように d で表記した。
- (2) La construction passive du parfait transitif, BSL 48, 1952. É. Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, Paris, 1966, pp. 176-186 に再録。引用は後者による。(Meillet-) Benveniste, *Grammaire du vieux perse*, Paris, 1931² においてすでに Benveniste は *ima taya mana krtam* を 'voici ce que j'ai réalisé' と訳している (p. 122)。
- (3) *Handbuch der Orientalistik, I, IV Iranistik, I*, Leiden-Köln, 1967, p. 90. 同じく Morgenstierne, p. 166.
- (4) 例えば G. Cardona, The Indo-Iranian construction *mana (mama) krtam*, *Language*, 46, 1970, pp. 1-12.
- (5) Geiger & Kuhn, *Grundriss der iranischen Philologie*, Strassburg, 1895-1901 (repr. Berlin, 1974) 中の Neupersische Schriftsprache, p. 148.

- (6) 伊藤義教『古代ペルシア』東京, 1974.
- (7) 『古代ペルシア』 p. 24.
- (8) 『古代ペルシア』 p. 34.
- (9) 『古代ペルシア』 p. 124.
- (10) 『古代ペルシア』 p. 42.
- (11) 『古代ペルシア』 p. 30.
- (12) Bartholomae は実際こう訳している。'...da wurde von ihnen die Schlacht geliefert', *Altiranisches Wörterbuch*, 1904 (repr. Berlin, 1961), col. 172, *avaθa* の項。
- (13) R. G. Kent, *Old Persian*, New Haven, 1953 (repr. 1961) p. 119.
- (14) R. Schmitt, *Nugae Bagistanenses*, MSS 30, 1972, p. 141.
- (15) Benveniste, 1966, pp. 178-9.
- (16) 『古代ペルシア』 p. 42.
- (17) 『古代ペルシア』 p. 31.
- (18) H. S. Nyberg, *A Manual of Pahlavi II*, Wiesbaden, 1974, p. 282. ここで言う主格はいわゆる主格 (Nominative) と対格を含み, 斜格はそれ以外の格を指す。なお例(1)では *man* を補い *hom* を *ham* に改めた。
- (19) 『古代ペルシア』 p. 284.
- (20) Rastorgueva はこの文を能動であると認めようとしている。 *Srednepersidskij Jazyk*, Moskva, 1966, pp. 98-100.
- (21) W. Henning, *Das Verbum des Mittelpersischen der Turfanfragmente*. ZII 9, 1933, pp. 242-4.
- (22) Benveniste, 1966, p. 180.
- (23) Benveniste, 1966, p. 177.
- (24) Meillet-Benveniste, 1931², p. 122.
- (25) 他に若干のアオリストがある。
- (26) Klimov も同じことを指摘している。 *Očerki obščej teorii ergativnosti*, Moskva, 1973, p. 106.
- (27) J. Lyons, *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge, 1971, p. 341f.
- (28) D. Edel'man, *O konstrukcijax predloženijsa v iranskix jazykov*, *Voprosy Jazykoznanija*, 1974, 1, p. 25.
- (29) Klimov, 1973, p. 106.
- (30) A. Lambton, *Persian Grammar*, Cambridge, 1967, p. 8.
- (31) J. Darmesteter, *Études Iraniennes, I*, Paris 1883 (repr. Amsterdam 1971) p. 124.